

書 評

『図説 損害保険流通ビジネス』

(株)トムソンネット 編

岩本堯・石井伸夫・川上洋・森岡伸彦 著



本書は、2023年に発覚した一連の損保不祥事とそれを契機とするその後の議論・制度改革を、単なる「事実の解説」としてではなく、日本の損害保険ビジネスの深層にある構造問題として描き出す一冊である。第1章から第8章までを通じて、過去（歴史）・現在（不祥事と制度改革）・未来（デジタル化と企業保険の再設計）を一体として論じるとともに、豊富な事例研究を通じて実態を浮かび上がらせている点に、本書の大きな特徴がある。

第1章では、ビッグモーター事件と保険料調整問題を、「政策株式」や「本業支援」といったキーワードを用いて位置付け、個別の問題ではなく、業界構造全体が抱える問題として提示している。自由化以降、確かに形式的には競争環境でありながらも、その実態としては、企業系列・長期取引に依存した旧来型のビジネスが温存されてきたことを明快に描き出している。日本の損害保険ビジネスが、本来あるべき「リスクマネジメント手段」の提供ではなく、「取引関係維持の手段」へと歪められてきた歴史的背景を、冷静かつ生々しく描き出すことで、一連の不祥事を個別の問題に矮小化してしまうことに警鐘を鳴らしている。

それでは、なぜこのような日本特有の構造が生じたのか。第2章と第3章では、この問いに対し「歴史」を手がかりに答えようとする。第2章では、海上保険の創成期

からロイズとフローカーの成立、ロンドン大火を契機とする火災保険と代理店制度の展開、自動車保険とタイレクト販売の発展、そして Progressive 社の戦略と革新の事例研究に至るまで、コンパクトに整理している。欧米の保険流通の基本構造を単なる形態の違いとしてではなく、歴史的・社会的な文脈の中で位置付けることにより、次章で論じる日本特有の構造との対比を可能にしている。続く第3章では、明治期から戦後高度成長期にかけて、保険会社が自社の「手足」として代理店網を全国に張り巡らせて成長してきた過程が描かれる。モーターゼーションの波に乗った自動車保険の爆発的普及は、自動車販売店を代理店として組織化することで実現したが、その成功体験こそが、現在の業界問題の根幹にもなっていることが示される。

第1章で描かれた不祥事の「土壌」がいかにか形成されてきたかを理解するという点で、これらの章は本書全体の土台をなすものである。

〔評者〕
柳瀬 典由 (慶應義塾大学商学部教授)

「第四の創業期」を好機に変える羅針盤

さらに、近年の変化として、インターネットなどによる非対面募集の拡大や、異業種からの保険販売への参入の現状について整理するとともに、エンベデッド保険（組込型保険）のような販売手法の改革についても紹介している。他方で、市場の飽和化が進む中、専業代理店の現状と課題、その「受け皿」としての直営代理店についても紙面を割いている。さらに、第5章では、金融庁の「損害保険業等に関する制度等ワーキング・グループ報告書」（以下、WG報告書）を読み解き、今後の制度改革の全体像と実務的含意を整理しており、本書の「一番の売り」と言ってもよいほど読み応えがある章である。WG内で共有されていた問題意識を的確に言語化したものであり、本書が単なる制度解説書にとどまらないことを示している。

第6章は、日本特有の制度環境の下で発展してきた企業保険市場、とりわけ企業内代理店に焦点を当てた章である。親会社グループの保険契約を「比較推奨販売」の明確な義務付けの狙い、保険代理店・保険会社に対する「体制整備義務」の強化など、不祥事の具体例と歴史的経緯を踏まえて整理されている。WG報告書における代理店業務品質の第三者評価制度構想や、生命保険分野での先行事例との比較、損保評価制度の位置付けも簡潔に紹介されており、実務家・規制当局・学生・研究者いずれにとっても有用である。さらに、これまでの商慣習を適正化するには、企業契約者自身のリスクマネジメント能力の高度化や保険リテラシー向上が不可欠であり、保険業法改正だけでは対応できるものではないという点も示されており、この指摘は、WG内で共有されていた問題意識を的確に言語化したものであり、本書が単なる制度解説書にとどまらないことを示している。

なお、評者としては、ここにくつか補足したい点がある。WG報告書の脚注44が指摘するように、親会社等が企業内代理店に支払う手数料の適正性を判断できるようにするには、親会社側のリスクマネジメント体制・能力の高度化が前提となる。また、脚注33が示す通り、保険の利用者である企業と企業内代理店では、リスクマネジメント

の決別と「リスクマネジメント産業への脱皮」という構造転換である。本書は、損保会社の経営層や従業員のみならず、代理店や保険仲立人、企業側のリスクマネジメント担当者にとっても必読の書である。また、評者のような研究者の立場からすれば、学術論文の「研究背景」を記述する際に、本書は必ず参照すべき基本文献の一つとなろう。日本の損害保険ビジネスの「過去・現在・将来」、その全体像をここまで立体的に示した書籍は多くない。損保会社にとっては自社の存在意義を問い直す鏡となり、代理店や保険仲立人にとっては、淘汰の波を乗り切るヒントとなる。そして何より、保険の買い手である企業担当者にとっては、「付き合いたい」ベースの保険選びがいかにより自社の利益を損ねてきたかを理解するうえで貴重な資料となろう。明治から戦後の高度成長、1990年代の自由化を経て変革期を乗り越えてきた日本の損害保険ビジネスが、この「第四の創業期」の局面を好機に変えられるか、本書は、そのための確かな羅針盤である。

（A5判、並製、228頁、（一社）金融財政事情研究会、25年12月26日発行、定価2860円〈税込〉）

入門リスクマネジメント論

多様化するリスクにどう立ち向かうか
石川 清英 著

企業におけるリスクとリスクマネジメントとは？－基礎理論と実践を学ぶ、社会人第一歩への入門書。

ISBN978-4-89293-486-5

●A5判・236頁
●定価 2,750 円(税込)
送料 660 円(税込)
(2025年4月刊)



詳細はこちら

お申込みはFAXまたはWebで

FAX 03-5816-2863 <https://www.homai.co.jp>

HM 保険毎日新聞社

東京都台東区台東4-14-8
シモジパークビル2F 03-5816-2861